

## 堀の内の中世居館跡をめぐって

—長野県上伊那郡辰野町の居館跡—

はじめに

現在長野県各地で圃場整備事業が進展しているが、これは上伊那郡辰野町の沢底地区においても同様である。この事業を通して、各地で歴史的な景観が失われ、貴重な歴史地名が消えつつあるが、この問題は沢底地区でも起きている。農業振興のためには圃場整備も必要であり、農業に従事している人達は労働の集約化のためにも是非とも整備を進めたいと考えている。現在に生きる人々の生活と、歴史的遺産とは必ずしも両立しないことが多く、歴史学を専攻し文化財保護を推進すべき立場にいる私としては、この両者のせめぎあいの中で苦しい立場にいる。

辰野町では、圃場整備事業の対象地に「堀ノ内」の地名を持つ水田があったことに教育委員会が着目し、その調査に乗り出した。

問題の堀の内については、『長野県町村誌』の朝日村分の中に次の記載がある。

本村の東にあり。永禄年中堀内左近住居せしと言伝へ僅に城址を存す。安政年中開田の節、直径三尺、直立一丈二尺周廻三丈余の穴二箇所あり、刀剣小柄筭等種々是あり、年間遠隔に付確証しがたし。

右のもとになった朝日村から長野県令にあてた報告は、明治十年（一八七七）になされているので、明治の早い時期において、す

笹 本 正 治

にその居館跡ははっきりしなくなっていたが、永禄年中（一五五八〜七〇）に堀内左近という者が住居していたと言い伝えられていたのである。しかもこの地は、安政年中（一八五四〜六〇）に水田が開かれ、その時に直径三尺（約九〇センチメートル）、深さ一丈二尺（約三・六メートル）、周囲が三丈（約九メートル）あまりの穴が二つ見つかり、中から刀剣や小柄、筭などが種々出てきたという。ちなみに、この居館については長野県の中世城館跡の集大成ともいえる『長野県の中世城館跡—分布調査報告書—』に収録されており、この地域を丹念に歩いて調べた篠田徳登氏の『伊那の古城』にも記載がなく、一般にはほとんど知られていなかった。地元の『辰野町誌』歴史編では、所在地を大字沢底山寺堀内とし、「河子沢川左岸の小大地。北に山寺の村居があり、河子沢の登り口。西から南に谷が開け、荒神山がよくみえる」と記しているが、これが『長野県町村誌』以来の記述である。

この居館跡は、じっくり現地を見ている人がいなければ、そしてその人に深い郷土に対する愛情と歴史的な知識がなければ、気がつかれないままに永遠に消えていったかもしれない。しかしながら、たまたま町史編纂に携わって知識を持った教育委員会の職員が地名に着目したのである。その結果、圃場整備が行われる前に、ここに学問の光を当てられることになり、目下発掘調査が行われている。こうした失われようとする地形や地名への着目は、地域の研究をす

る上で大きな意味を持つと考える。

本稿はそうした辰野町教育委員会の営みに触発されて、自分なりに問題になっている居館跡について考えてみたいと思ったことから出発した。この堀の内の居館跡について、消えて行こうとする地名や地形の中から、どれくらいのことを読み取れ、それによってどのような歴史事実が浮かび上がってくるのかに挑戦したい。

## 一 地名と地形

最初に地名や地形などを元にして、堀の内の居館跡について考察する。まず最初に居館跡のある地域の全体像から確認しよう。

辰野町は長野県上伊那郡の最も北側に位置し、伊那谷の北端であるが、沢底は町の中で東に位置し、山を隔てて諏訪市と接する。沢底の南には赤羽と樋口の集落が続くが、赤羽は沢底から分離したものである。沢底の中心部を流れる沢底川は、諏訪市の青木沢から流れ出て西南に向かい、赤羽で天竜川と合流する。沢底川はいくつかの小さな沢を合流するが、堀の内の北側、山寺地区においても河子沢と山寺沢の二つの沢が入り込む。

堀の内の居館の成立の占地では道路が大きな要素になっていると考えられる。そこでこの地域の道路を確認しておこう。明治十年（一八七七）の朝日村の絵図<sup>5)</sup>によれば、沢底川の西側を二等道路が走っている。この道路は南から北へ、樋口、赤羽、平出と抜け、諏訪市の上野へとつながっている。山寺はこの道路から東にはずれるが、里道三等が堀の内の前を通って平出に抜けている。沢底の枝村で山寺の北に位置する鴻の田は、川底川の北側を流れる上野川の上流にあり、ここを上ると諏訪市の覗石、さらに有賀峠へと続く。また、平出からの道は上野を経てやはり有賀峠へ行ける。加えて沢底

川をさかのぼって、諏訪側に抜けることも可能である。

以上の概略を見た上で、地名から情報を読み取ってみよう。堀の内は江戸時代の沢底村に含まれるので、この地名から検討することにした。

『長野県町村誌』は沢底を、

本村（朝日村）の東にあり。西は赤羽と田圃入交り、南は日向山に連り、東は湖南、豊田の両村に接し、北は平出山を界し、東西四十六町、南北三十五町。往古は多底郷と云ふ<sup>6)</sup>。

と、村の位置をまとめ、村の名前は昔、多底としていたとする。一方、文化九年（一八一二）にできた『伊那志略』は、昔「田底」といって、鴻野田、岩鼻の二つの枝村があると説明している。

また、最新の現地の説明書ともいえる『辰野町誌』は、次のように記述する。

南向きに開けている沢底の谷は、周囲の山々がなだらかで、水にも恵まれているので水田も多く、稲作の歴史の古さもしのばれる。沢底川の流ればゆるやかとはいえないが、山が低くて谷が浅いので漢字で「沢底」と書くような景観は少しも感じられない。この谷の上流は、古来諏訪との関係が深く、諏訪の領分が尾根を越えて伊那側へ深く喰い下ってきている。沢底の地名の起こりは「諏訪底」ではないかとの説もあるが、諏訪側から「後山」とか「上野」などといったように山を越えた向こうの意でそう言ったのかも知れない<sup>8)</sup>。

景観からすると沢底といったイメージでないと強調し、諏訪底説を紹介して、諏訪との結びつきを示している。

次に史料の中から、この地名を史料から確認すると、延文元年（一三五六）成立の『諏訪大明神絵詞』（権祝本）



1 図 堀の内居館跡地字図

「沢寺」<sup>(9)</sup>

文明二年（一四七〇）三月付けの矢島文書―「さそこ」<sup>(10)</sup>

天正六年（一五七八）二月付けの「上諏訪造宮帳」―「沢底の原

口之田別錢にて」<sup>(11)</sup>

天正年間（一五七三〜九二）の守矢文書―「佐瀬子」<sup>(12)</sup>

天正十八年一〇月一七日付けの市岡文書―「さそこ 四百八俵

五斗」<sup>(13)</sup>

天正十九年（一五九一）成立という『信州伊奈青表紙之繩帳』

―「佐そこ村」<sup>(14)</sup>

『赤羽記』―保科筑前守の所領として「諏方の界サソコ五百石」<sup>(15)</sup>

正保四年（一六四七）の『信濃国絵図高辻』―「赤羽村」二〇〇

石、「沢底村」三四四石<sup>(16)</sup>

などといった順序になる。本来「さそこ」あるいは「さそこ」と呼ばれていた地名に、「沢底」の漢字が当てはめられたのである。つまり、最初から沢底というイメージでこの地名が呼ばれていたわけではなく、「さそこ」あるいは「さそこ」の言葉に意味があったのであろう。この語に近世になって「沢底」の漢字が当てられ、沢底の意識が固定したと推察される。

沢底より小さい区域を指す地名に、現在集落のある山寺がある。

『長野県町村誌』は朝日村の毘沙門庵を説明して、「往古は多聞山松月庵と相唱、建久三壬子年草創にて、本尊毘沙門天は源頼朝公信仰の霊像。当所より東方三一町距離し、方一町なる平野あり、字山寺山と唱へ、其所に堂宇有之、後野火にて延焼、天文年中今の所へ転地す。旧地へ石造の小祠を建立し、干今存在す。沢底耕地持庵なり」とする。この説明によれば、山寺の地名は建久三年（一一九二）に建立された寺にちなむことになる。各地にある山寺の地名か

らしても、地名が山の寺の存在から生じた可能性は高い。

『高白齋記』天文十一年（一五四二）十月一日条に、「廿九日丙子、信形上伊那口動、十月大、朔日、丁丑、高白陣所上伊那山寺」という記載がある。ここに見える山寺は沢底の山寺を指すとされる。

『高白齋記』によれば、高遠頼継の軍が同年九月十日に下諏訪に放火したため、翌日、板垣信形が軍を動かす、その後二十六日に高白齋は藤沢口（高遠町）に放火した。二十八日に養輪次郎（藤沢頼親）が信玄の元に出仕し、二十九日に板垣信形が上伊那口へ働き、前記十月一日と続くのである。

この時期武田氏にとって最大の敵は高遠頼継だった。『辰野町史』が指摘するようにもしこの山寺が沢底の山寺なら、高白齋はいったん諏訪に帰ってから、再び有賀峠あたりを越えて伊那に入ってきたことになる。上伊那口という記載からはこの可能性が高い。しかし武田氏の当面の敵は高遠氏で、藤沢氏は武田氏に従っていたのであるから、陣所は高遠攻撃のためである。一般的に上伊那で山寺といえば、現在の伊那市山寺が有名で、この方が高遠の谷に伊那側から攻めるに際しては入口になる。山寺は伊那市山寺の可能性も捨て切れないが、一応通説に従っておきたい。

次に堀の内館跡の地名について探ろう。問題の地域の地字を図示すると1図（本図は辰野町教育委員会作成）のようになる。城館跡の研究にあたって地名の重要性は早くから主張されている<sup>(20)</sup>。その最たるものが「堀ノ内」である。ちなみに「ホリノウチ」を『改訂総合日本民俗語彙』は、

堀之内。奥州から九州にまで分布している地名で、町村にも字・小字にも見える。東京都下や埼玉県にはこの地名が殊に多く、『新編武蔵風土記』には八十四の字を掲げている。城址にある

村には多くの堀之内の小名ありと同書に見え、堀というただちに城砦を想像しやすいが、事實は堀之内は必ずしも戦術上のものではなかった。中世の武士は通例砦には住まず、戦時の妨げ地は険阻な山の上であって、平時は平地にあたかも大地主のようにして住んでいた。その屋敷を取り囲んだ工作物が堀で、往々その内には田も畑もあったようである。その中には後閑すなわち空閑地を含む堀之内もあり、ドイツのホーフに比べられる名主の垣内を思わしめる。<sup>(21)</sup>

と説明し、ほとんど同じ説明を柳田国男もしている。<sup>(22)</sup>

また、鏡味完二『日本の地名』は、「ホリノウチ(一)「堀の内」すなわち豪族屋敷。(2)「壑(ホリ)の内」で開墾地。東北地方に多い」とする。『長野県町村誌』の記載からして、この地の堀の内<sup>(23)</sup>の地名が居館を示すことは確実である。1図によると堀ノ内の地字は「腰巻」の東側の堀ノ内である。その東側の堀ノ内は田圃の境が直線であることからわかるように、比較的新しく水田になったと思われ、境界線なども変更されていよう。おそらく『長野県町村誌』の記載に見えるように安政年中、この地域に水田が開かれた時に堀ノ内の地字が、新しくできた水田にまで広げられたのであろう。いずれにしろ河子沢の南側、尾根に至るまでの平地がひとつのつながりを持つ場所として意識され、堀ノ内の地名になったと推察される。

堀ノ内の地名の西側の「腰巻」は、居館の腰部を巻く場所の意味で、腰郭もしくは堀の跡であろう。地形からすると、館跡の北側の日影、さらには腰巻の南側のホウゲも同じ役割を持つ場所であったと考えられる。

なお、南側のホウゲは地形からして本来腰郭であったと思われるが、地名は腰巻でなくホウゲである。この地名はもう一か所東側にも残っている。ホウゲに当たる言葉は『日本国語大辞典』<sup>(24)</sup>で探すと「放下」がある。その意味は、①「禪で、精神的・肉体的な一切の執着を捨てて解脱すること。また、執着を起こさせる種々の条件を放棄すること」、②「投げすてること。投げおろすこと」「捨て去ること」、③「中世・近世に行なわれた芸能の一つ。小切子(こぎりこ)を打ちながら行なう歌舞・手品・曲芸などの芸。また、それを専門に行なう者」である。地名に①や②のような動作はつきにくいので、③の可能性がわずかに残る。また、「ホウゲ」は「ホウケ」が変化したものだとなると、「法家」の語がある。これは「古代、中世、律令などの法律に関する学問を専門とする官吏。明法博士(みょうぼうしはかせ)・勘解由使・判事などの職に任ぜられることが多いが、特定の官職ではない。転じて、代々その学問を伝える家。また、その家の人」である。仮にホウゲが屋敷に住んだ人の從者的な人の住んだ場とするなら、職人的な芸能者ということであろうか。

その他に、「ホウゲ」が「ボウゲ」からの転であるとなると、「防碍」が考えられる。これは妨害と同じ意味である。居館の入口を押える位置にこの地名がついていることからすると、他人の侵入を防ぐ防御のための装置の場所となり、この可能性も出てくる。この程度の規模の居館に住む主が職人・芸能人的な者を抱えていたとは考えたいので、どちらかといえば防碍の可能性の方が高いだろう。

堀ノ内の北側にある日影は、一段低くなっているので、地名の通り日陰になる。この地名は日陰になりやすい状態をいったものである。その北側にはサイカチ田が広がる。サイカチは河原などの水辺の原野に多いマメ科ネムノキ亜科の落葉高木である。この地名は

水田を開く前にサイカチが生えていた場所ということであつたものだろう。

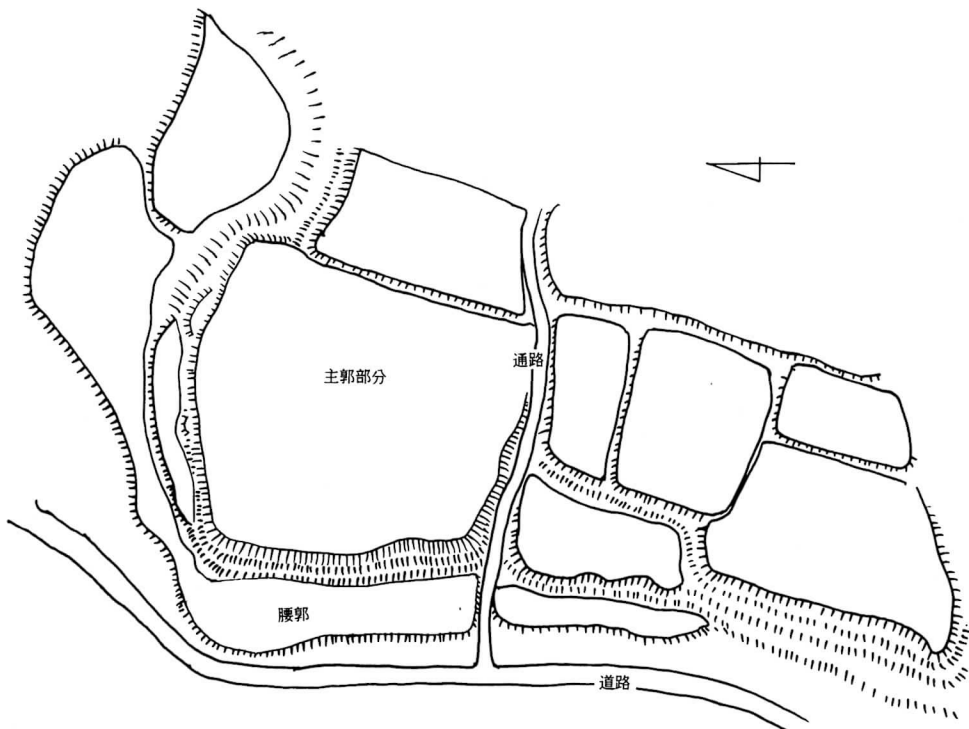
以上見てきたように、堀の内居館跡は沢底という谷間の入口にあり、周囲の地名も地形も十分に居館跡であつたことを示している。

## 二 居館の構造

これまで述べてきた地形や地名などを元にして、実際に中世の居館跡と考えられる場所を考察してみたい。現況の縄張図を示すと2図のようになる。この場所は標高はだいたい七五〇メートルである。

地形的に見ると河子沢が沢底川に合流する直前の高台を占め、南側に山の尾根がぐるぐるの形である。現在は居館跡の西側、字腰巻のすぐ下を県道が走っており、県道の西側の一段低い場所に水田が広がり、さらに沢底川とつながる。地形からして、おそらくこの道は戦国時代も同じルートを通っていたであろう。

堀の内の主体をなす居館があつたと考えられる平地（水田、字堀ノ内）は、南北約四五メートル、東西約四〇メートルで、北側の幅が広く、南側は狭い、やや台形に近い形をしている。そして下部に当たる腰巻へ落ちる切岸も必ずしも一直線ではなく、整形はしつかりしていない。東側の水田を区画する切岸と比較するとその差は明瞭で、安政年中（一八五四〜六〇）に水田にするため整形された場所の区画がまっすぐなのに、古くからの形を残すと思われる部分はカーブを描いている。これには、居館が作られた時代から隔たったために、本来はもっと直線的にすっかり区画されていたのが、時とともに現況のように変化した、あるいは本来的にすっかり区画を作らなかつた、の二つの原因が考えられる。おそらくこの二つが一緒になって現況になっているのであろう。



2図 堀の内居館跡縄張図

地形からして、東側は切り取られて崖のようになって上に連なっていたものであろう。それ以外の三方、屋敷地の外側には土塁が巻いていた可能性が高い。現在でもこの水田の畦はやや幅が広いが、これはその痕跡かもしれない。いずれにしる水田を作る時、周囲の土塁などは崩されたであろう。したがって、発掘調査により土塁の基底部が判明することが期待される。

敷地内では北西の隅が最も見晴らしがきき、箕輪町方面の伊那谷が良く見える。ところが南東に行くに従って、南側の尾根にさえぎられて眺望が悪くなる。この傾向は日当たりにおいても同じで、北西は日当たりが良いが、南東は日当たりが悪くなる。少なくともこの地域より南側、山付き地帯では冬の雪の消え方も一段遅く、決して住宅環境としては良くない。

堀ノ内の西側にある腰巻は、道路面よりも上にある。道路から眺めると、一段高いところに腰郭があり、さらに見上げるように屹立した場所に居館が設けられていたことになる。したがって腰巻は腰郭で、防御的な要素が大きかったと推察される。腰巻の地字は幅がだいたい五メートル、南北四〇メートルほどである。この高さと同じ幅の腰郭と思われる地形が、ホウゲまで続いている。元来は一連のもので、ホウゲも腰郭だったのであろう。腰巻とホウゲの間を分断する道は、切岸の状況からすると、後から作られたものではなく、居館を築く際にすでに作られていたようである。なお、居館の北側の日影の地字を持つ場所も同じく腰郭の可能性が高い。こちらの腰郭の整形が少ないのは、その北側の河子沢が流れていて、防御しやすいためであろう。

居館の全体像からすると、北東の隅で自然地形よりも北に飛び出しているように感じられる。沢の流れが北側にやや湾曲しているの

で、北東には土を盛って形を整えたのであろう。位置的にはここが鬼門になる。現況の地形は居館のできた時期に整形された可能性が高い、もしそうだとするとこの位置には何らかの意識があつて、少し北側にせり出させたのではなからうか。この位置が鬼門にあたることと関係するかもしれない。居館の切岸においても、北東と北側の中央、それに南側の堀ノ内の西側において、やや突き出した奇妙な部分が見られる。これは防御上の装置か、あるいは単なる崩れの結果か不明であるが、一応指摘しておきたい。

ホウゲの東側の堀ノ内の地字は、腰巻の東側の堀ノ内地字より一段と低い。地形からして、この場所も居館と共に作られたものであろう。その東側のホウゲ、およびその南側の堀ノ内は居館の中心をなす堀ノ内より一段と高くなっており、ここが居住域として想定されたとは考えがたい。この部分は前述のように防壁で、居館を守る意味を持った可能性が高い。

居館が築かれたと考えられる堀ノ内地字の東側の堀ノ内、ホウゲの東側の堀ノ内は、一段と高くなっており、水田が開けている。これは安政年中に開かれた水田なので、居館が営まれていた時期の地形はとどめていない。居館の大きさからしても、この部分に居館に付属する設備は少なかったのではないだろうか。

したがって、地形と地字からすると、居館は堀ノ内地字の四五メートルかける四〇メートルの平地を中心に築かれていた。これを守るように腰郭が設けられていて、特に道路に面した部分はしっかりとした形に造られていた。郭の南側の堀ノ内の地名を持つ一段低い部分は、居館と共に造られた施設だろう。その東側の一段高いところにあるホウゲ、堀ノ内は居館の一部かとも考えられるが、実際には居館の安全を確保するために空間を占地した程度であったと考える。



それでは居館の入口はどこにあったのであろうか。腰郭を分断した形の道が、水田開発時に新たに設けられたとは思われないので、ここが通路であった可能性が一番高い。その場合、入口は居館跡の南東の隅ということになる。しかし館跡が水田になっていたこともあり、虎口のような入口を想定させる遺構は何も残っていない。居館はそれ自身の高さ、南北の腰郭、ホウゲの存在によって防衛したものであろう。道路から直角に入らせ、しかも南北の堀ノ内の地名の場所から通路を見ることができるので、ここを通路にすれば安全性は高い。

そうすると、腰巻の南にあるホウゲの東の堀ノ内は、どのような意味を持ったのであろうか。先にも述べたように、居館と連動して居館を守る装置があった可能性がある。同時に居館より一段低い面なので、もしここに居住するならば、居館に住めないランクの従者がいた可能性がある。居館部分よりも日影で居住に良くないということも、これに加味しなければならぬ。仮にここが居館の主隷属するような人々の居住域だったとすると、居館内における身分と居住域とを考える材料になるだろう。しかし発掘がなされていない現時点では、可能性を指摘するにとどめておきたい。

居館の中には建物<sup>25</sup>が建てられていたはずであるが、それについては発掘結果が出ていないので想定できない。日当たりや眺望からして、おそらく北側を中心に建物が建てられていたと推察する。水田を作る時に攪乱されたとは思われるが、礎石跡などの遺構が出てくれば実態を明らかにできるであろう。

注目すべきは、『長野県町村誌』のこの居館跡に対する、「本村の東にあり。永禄年中（一五五八〜一五七〇）堀内左近住居せしと言伝へ僅に城址を存す。安政年中（一八五四〜六〇）開田の節、直径

三尺、直立一丈二尺周廻三丈余の穴二箇所あり、刀剣小柄筭等種々是あり、年間遠隔に付確証しがたし」との記載である。直径約一メートル、深さ二、五メートルほどの穴が二か所見つかり、その中から刀剣や小柄、筭など種々のものが出たというのである。これだけの深さであるから、水田の底にその痕跡が残っているよう。発掘調査でその位置や概要がわかることを期待する。

穴から出たものは金属製の武器や飾り物など高価なものが多い。どのような状態で出土したのか伝わらないので判断は難しいが、単なる廃棄土坑ではなさそうである。そうなると貯蔵用の穴だったことになるが、この点判然としない。もし貯蔵用の穴なら、この家では倉を持たずにいたことになり、居住者は必ずしも経済力のある地位の高い人物とは言えなくなる。一方で廃棄土坑でないとすると、なぜこれらの物を入れたままこの家の人達がよそに行ったのか問題になる。しかしこの穴は、この居館を考えていく上で大きな材料といえよう。

それでは、ここにはどのような人が住んでいたのであろうか。明治十年の『長野県町村誌』の段階で、永禄年中堀内左近なる人物が住んでいたとの言い伝えがわずかに残るだけであった。近世末にこの地が水田にされていること、周囲に家が建っていないこと、この場所が全体としては日当たりが悪くて居住には適していないことなどから、中世に本来的にこの地に根を張っていた家が、勢力内に居館を設けたのではなく、他所からやって来た者が、伝説のように一時的に住み着いていたものであろう。

居館の主と伝えられる堀内左近は、地元では「ほりのうちのさこん」と呼ばれている。「ほりのうち」が堀の内だとすると、居館を示す一般的な名称で、名字でない可能性が高くなる。堀の内（居



館)に住んだ左近という人物として、名前が伝わっているだけである。その場合、地元にとってこの人物は極めて影の薄い人物で、なおかつ地域とは深い関係を持たなかったことになり、やはり一時的によそからやって来て、ここに居館を構えたに過ぎないことになる。なお、居館が築かれた時期としては伝承のように永禄年中(一五五八〜七〇)、戦国時代の後半が大きな候補時期になる。居館は残っている地形の状況、地名、防御のあり方などからしても、ほぼ戦国時代の末期、永禄年中のものとして良いと私は考える。

### 三 山寺の中での居館の位置

これまで地名や地形などを中心にして堀の内の居館跡を考えてきた。これを居館のある山寺地区、それより広い沢底、その上の辰野町、さらに上伊那全体の中に、どのように位置付けることが可能なのであろうか。

沢底のうち山寺の集落の地名を見ると、堀の内から河子沢を隔てた北側に、西垣外、古屋敷の地字があり、現在もこの場所に民家が建っている。このうち垣外地名は論議の多い地名<sup>26</sup>であり、柳田国男は、カイトを「垣外は文字の如く垣の内です所謂土豪の囲ひ込んだ地域を意味する<sup>27</sup>」とする。戸田芳実も「古代、中世の農村で周囲に垣をめぐらして他と区別した一区画の土地<sup>28</sup>」としている。いずれにしても、垣外は古くからの開発にかかわる地名である。また、古屋敷は新屋敷に対し、ここに古い屋敷があったことを示そう。つまり、山寺集落の居住区は河子沢と山寺沢にはさまれた地域に設定されたのである。

西垣外などの地名の場所から沢を隔て北側に行くと、歳ノ神、堂ノ前といった宗教地名が多くなる。宝暦四年(一七五四)五月に小

松軒悠兮が撰し、高木正敏が明和八年(一七七一)に書き写した『伊那郡神社仏閣記』によれば、沢底村には八幡宮・鎮大明神・堂があった<sup>29</sup>。そのうち八幡社は赤羽と沢底の境の八幡坂に鎮座していた(現在は津島社と合祀され荒神山に移された<sup>30</sup>)。鎮大明神は現在沢底ワゴにある鎮大神社で、山寺の集落からは五〇〇メートルほど北に位置する。沢底で堂とされるものには、日向にある地藏堂、中組にある薬師如来堂、山寺にある毘沙門天堂の三つが考えられるが、山寺の地名の由緒などからして山寺の毘沙門天堂であろう。堂と並んで歳ノ神があるが、鏡味完二『日本の地名』はサイノカミを「峠の神<sup>32</sup>」とする。いずれにしろこれは塞神であろう。

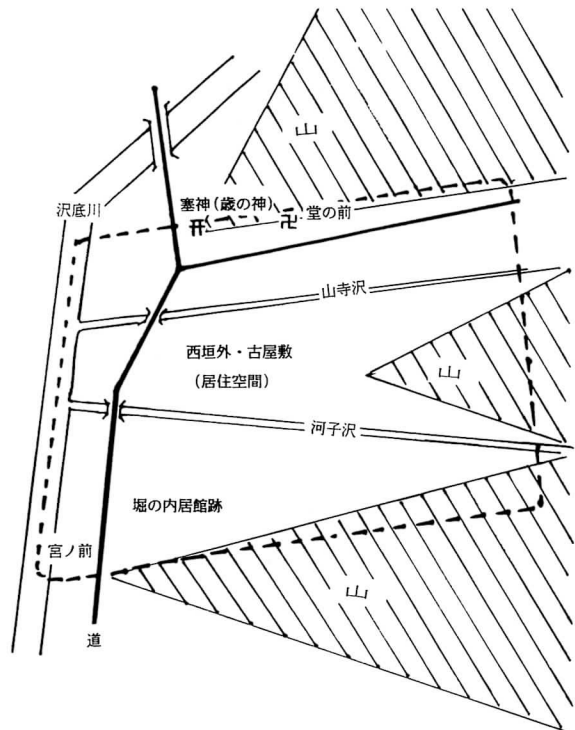
沢底の中であって、山寺は周囲の環境や立地からして独立した一つの世界を形成していた。まず宗教的な施設などから確認している。集落の北側には歳ノ神の地名があり、実際ここに神が祀られている。前述のようにこの歳ノ神は塞神で、北側から村に入ってくる通路を前提に、集落の境界を守る神である。その東に位置する毘沙門天堂は、本来東方の山寺山にあったものを天文年中(一五三二〜五五)に今の場所に移したという。堀ノ内の西側の水田は「宮ノ前」「宮前」で、沢底川を隔て「鳥居田」もある。地名と位置からすると現在の堀ノ内の地字の南端、あるいはさらに南の飛び出した尾根の先端あたりに御宮があった可能性が高い。仮にこの位置に御宮があったとすると、その御宮は北側の歳ノ神に対応して、南側で集落に邪悪な神などが入ってくるのを防ぐ役割を負ったといえよう。さらに、山寺と赤羽の境界には八幡社があった。イメージ的には戦国時代の山寺は、西に北から南へと沢底川が流れ、これに山寺沢と河子沢が東から流れ込む。山寺沢の北側、河子沢の南側にはそれぞれ尾根が突き出し、二つの沢に囲まれた東の山が山寺山である。

山寺の集落は、現在は歳ノ神の東側（山寺沢の北側）にも展開しているが、明治十年の朝日村の絵図を見ると、河子沢と山寺沢とはさまれた高台のみである<sup>(33)</sup>。集落は宗教施設の作られた二つの尾根にはさまれるように存在し、特にその間の二つの沢に囲まれた場所に人家が設けられたのである。集落の東側は山寺が建立された山で、西側には川が流れる。尾根、したがって峠と直結する場所は境界領域で、寺社が設けられた。また、川や沢もあの世とこの世との境界領域である。つまり、山寺の集落は自然物としてあの世とこの世の境界をなすような川、沢、尾根、山に抱かれた台地上に分布し、しかも実際の村の入口となる北側には塞神が祀られ、南側にも御宮が建立されていたのである。集落は神々に囲まれた平和な場所だという意識が強く働いて、形成されていたといえよう<sup>(34)</sup>。

このことは直接的な外敵からの防衛にも役立つ。すなわち沢底川と山寺沢、河子沢は天然の堀としての役割を持ち、しかもその前面には山の尾根があるので、住民の感覚としても、閉ざされた平和な場所に思えたであろう。イメージ的には3図のような形で山寺の集落はできていたのである。

次に居住空間としては、日当たりと水の確保が問題になろう。山寺の地は沢底の地名で知られるように、全体として沢底川の谷間であっても、谷が全体として南北に走っているの、ある程度の日当たりが保証される。しかも古屋敷などの地名の残る場所は、谷の東側のやや高台で、北側に山が近くなって南下がりの傾斜があるため日当たりが良い。水は北側の山寺沢の水を使えば、容易に生活用水となる。

山寺の集落の東側、最も高い場所に現在山寺氏の住宅がある。ここは山の麓で、河子沢と山寺沢の両方の水を押さえることのできる



3図 山寺集落概念図

場所といえる。しかも名字である山寺は地域の名称でもある。こうした地域の名称を名字にするような家は、戦国時代までに地域の土豪としてあった場合が多いので、この家もそうした系譜を引くのではなからうか。ちなみに、俗に上伊那十三騎と呼ばれる天正（一五七三〜九二）ころ上伊那にいた有名な土豪の中に、山寺氏が入っていない<sup>(36)</sup>。

河子沢と山寺沢にはさまれて、西垣外、古屋敷、中垣外などの地名がある場所は、二つの沢が堀の役割をして防衛上に都合が良く、しかも日当たりの良い、屋敷を構えるのにうってつけの場所である。もし、堀の内の居館の主が本来的に山寺に根を持っている家だったとしたら、この台地上に居館を構えるはずである。それが集落から

離れた、日当たりの良くない場所に居館を築かざるを得なかったのは、後から入ってきたためではなからうか。

居館の位置からして、この居館がなぜここに作られたかの最大の理由は、居館の西側を走る道の存在にあるだろう。諏訪上社の中世における廻漕神事で、外県神使は平出泊、小河内泊、真木泊、伊奈部泊、御園泊、前淵泊、沢底泊で帰着している<sup>(3)</sup>。このことから、沢底は諏訪とを結ぶ重要なルートになっていたといえる。天文十一年(一五四三)に高白齋が陣所を山寺に置いたことからしても、戦国時代の山寺は諏訪と伊那とを結ぶ交通上の要衝であり、そのルートは居館の東側に現在も走る道に重なる。道をはさんで居館の反対側には、宮前、善光の地字の水田があり、その西側を沢底川が走る。この水田は本来沢底川の河原で、道は動かなかっただろう。南側から沢底に入り、この道から居館を見ると見上げるような形になり、居館の上から道を見れば逆に目の下であり、道を押える恰好の位置といえる。

この道を押える場合でも川子沢と山寺沢との間の二反田あたりの方が、防御上からも、日当たりなどからしてもよい。道を押さえる意図を持つての居館が堀ノ内に作られねばならなかったのは、すでに山寺には集落が存在しており、よそから入ってきた館の主がこの地を占拠するほどの力をもっていなかったためであろう。

それでは、何ゆえにこの居館の主はこの地に居館を構える必要があったのであろうか。その理由の一つは、この館の主がこの地域に所領を得て、移ってきた可能性である。その場合であっても、普通ならその人物は自分の本領を持っていたはずで、よほどの理由がなければ、この地に移ってはこなかったであろう。それまでに所領を持っていなかったのが、この時点ではじめて所領を手に入れた。も

しくは、それまで自分が持つていた所領よりはるかに大きな所領を手に入れ本拠を変えたとするものであるが、この地域にそれほど生産力があるとは考えられず、可能性は少ないであろう。もう一つは、この館の主が仕えた主人によってこの地に配されたとするものである。その場合、ここに置かれたのは館の前の道の警護と考えられる。この場合、所領も近辺で与えられただろう。可能性としてはこちらの方が大きい。

#### 四 歴史の中から

城や居館などは戦乱と密接な関係にある。堀の内の居館跡については、明治初頭の現地に永禄年中(一五五八〜七〇)に堀内左近が住んだという伝承があった。すでに天文年中(一五三二〜五五)の武田氏の伊那侵略の動きについては少し触れたが、もう一度この頃の大きな歴史的な流れを、特に戦乱に及んだ武田氏の伊那侵入と武田氏の滅亡から確認し、戦国時代の辰野町の山城や館跡から、永禄年中と伝えられる堀の内の居館跡を考えてみたい。

まず武田氏とこの地との関連から見よう。天文八年(一五三九)十二月九日に諏訪では諏訪頼満が死に、孫の信重が二十四才で継いだ。甲斐の武田信虎は佐久に侵入するため頼重との同盟を強化し、娘の祢々(信玄の妹)を嫁がせた。天文十年五月に信虎は村上義清や諏訪頼重とともに小県郡を攻め、信濃から帰ると娘婿の今川義元のもとへ赴いた。武田信玄(この時期にはまだ晴信であるが信玄で統一しておく)は、直ちに甲斐と駿河の交通路を遮断させ、信虎が甲斐に戻れないようにして、武田家の家督を継いだ。

諏訪頼重は諏訪郡の住民が連年風水害を受け疲弊していたにもかかわらず、連続して軍を動かしたため、人望を失っていった。高遠

(高遠町)にいた諏訪氏一族の高遠頼継は、自分の家が諏訪氏の総領職を継ぐべきだと考え、機会を見て頼重に取って代わろうとした。この頼継に諏訪上社祢宜大夫矢島満清も結び付いた。また一旦諏訪氏の支配下に入った下社の金刺氏も、勢力の回復をねらっていた。

信玄はこうした反頼重派と手を結んで諏訪氏を打倒することにした。天文十一年六月二十四日、頼重の住む上原城(茅野市)に武田・高遠・金刺の連合軍侵入の連絡が入った。しかし武田氏と長年同盟関係にあった頼重は信用せず、二十八日になってやっと軍勢を集めた。翌日、高遠軍が杖突峠を越えて諏訪に侵入し、安国寺(茅野市)門前に火を掛けた。頼重はこの夜家臣の勧めで桑原城(諏訪市)に移り、上原城に火を放った。七月四日、頼重は武田方からの和談の申し入れにしたがって開城し、翌日、甲府に連行され、二十一日に切腹させられた。諏訪郡は宮川(茅野市)を境にして西は高遠頼継、東は信玄が領することになり、上原城には武田の守備兵が置かれた。

高遠頼継は諏訪氏の総領職を狙って信玄に味方したのに、得たのは宮川より西の諏訪郡だけだった。そこで矢島満清と語らい、箕輪(上伊那郡箕輪町)の藤沢氏や上伊那の春近衆とも結んで、九月十日に上原城を攻撃して守備兵を追い払い、諏訪下社にも兵を出して上社とともに占領した。武田方は翌十一日に板垣信方を諏訪に向かわせ、信玄も頼重の遺児虎王を擁して十九日に甲府を立った。

信玄は二十四日に諏訪上社に戦勝を祈り、翌二十五日、安国寺門前の宮川のとおりで高遠軍と合戦したが、圧倒的な勝利に終わった。頼継はかろうじて高遠へ逃げ返り、満清も逃亡した。翌日、武田方の武将駒井政武(高白斎)が上伊那に入り、守矢頼真の案内で藤沢口(高遠町)に放火し、福与城(箕輪町)の藤沢頼親を攻めて二十

八日に降伏させた。板垣信方も二十九日上伊那口(有賀峠)に出動して残兵を掃討した。こうして完全に諏訪郡を平定した信玄は、翌天文十二年五月に上原城を修築して、板垣信方を諏訪郡代として在城させた。

しかし頼継が再び諏訪を攻略しようとし、藤沢頼親も彼と結んで武田氏に反旗を翻そうとしたので、信玄は天文十三年十月末、伊那に出兵し頼親を福与城の前進基地である荒神山城(辰野町)に攻めた。しかし頼継が頼親を支援したため攻め落すことができず、十二月九日甲府へ帰った。これに乗じて十二月八日の夜に頼継軍が諏訪に乱入して、神長守矢頼真の屋敷に放火した。

翌天文十四年四月十一日、信玄は高遠攻略のため甲府を出発して、十四日上原城に着き、翌日杖突峠に陣を張った。頼継は十七日に城を捨てて逃亡した。十八日、信玄は高遠に入り、二十日には福与城の藤沢頼親を攻撃した。しかし城は要害で、立て籠った人数も多く、そのうえ頼親の妻の兄の深志の小笠原長時が救援のために竜ヶ崎城に入ったため、落城させることができなかった。やがて武田軍にも今川義元と北条氏康の援軍が加わり、六月一日に板垣信方軍が竜ヶ崎城を落城させた。十月十日に頼親も和議に応じ、翌日弟を人質に出し、城は焼かれた。信玄は十三日に小笠原長時の領内である塩尻に兵を出したうえで甲府へ帰った。こうして上伊那も武田氏の勢力下に入った。<sup>38</sup>以上が武田氏の諏訪・上伊那地方の侵略過程である。天文十四年(一五四五)から上伊那は完全に武田氏の支配するところとなったのである。

次に時代を下って武田氏の滅亡について確認しておこう。勝頼は天正三年(一五七五)の長篠合戦後の態勢立て直しと、新たな領国支配をめざして天正九年二月ころから新府城(山梨県韭崎市)を築

きはじめ、織田信長に対処しようとした。工事は順調に進み、勝頼も二月の初め頃までに新府城に移った。

信長は十二月十八日に、甲州進攻の準備として黄金五十枚で米八千俵を購入し、三河の牧野城(愛知県豊川市)に備えた。木曾義昌は情勢を見て天正十年一月二十五日、弟を人質に出して織田信長と通じた。これを知った武田勝頼は二月二日に息子の信勝などと共に、兵一万五千で義昌討伐のため出陣し、諏訪の上原に陣を据えて、よその国から武田氏の領国へ入る諸口の警備などを申し付けた。

勝頼が軍を動かした翌二月三日、信長は武田領国に攻め込むように命令を下した。この日、信長の長男である信忠は、森勝蔵長可・団平八忠直に尾張・美濃の兵と共に、木曾口・岩村口から武田領国に攻め入らせた。

武田軍は伊那口の重要な場所を警固し、滝が沢(長野県下伊那郡平谷村)に要害を構えて下条信氏を入れて守らせたが、信氏の家臣の下条九兵衛が逆心を企て、二月六日に信氏を追い出し、岩村口から河尻秀隆の人数を率いれて信長に味方した。

二月十二日、織田信忠が木曾義昌救援のため出陣し、土田(岐阜県可児市)に陣取り、十四日には岩村(岐阜県恵那郡岩村町)に着陣した。この状況を見て伊那郡松尾(飯田市松尾)城主の小笠原信嶺が信忠に降った。妻籠口から信濃に先陣として入っていた団平八と森勝蔵は、清内路口(下伊那郡清内路村)より軍を進め、木曾峠(大平峠、南木曾町と飯田市の間の峠)を打ち越して、なしの峠に上った。織田に味方した小笠原信嶺が手合わせとして所々に煙を上げたので、飯田城(飯田市)を守っていた坂西織部と保科正直は敗走した。

武田軍は木曾義昌攻撃のため、二月十六日に鳥居峠(木曾郡檜川

村と木祖村との間)へ軍勢を出した。対する木曾義昌の軍には、苗木久兵衛父子や織田の援軍が加わり、鳥居峠で武田軍を破った。

なおこの日、信忠は岩村から平谷(下伊那郡平谷村)に陣取り、翌二月十七日、陣を飯田に移した。これに対処するため勝頼は大島城(下伊那郡松川町)に信玄の弟の信廉を入れ、小原継忠、日向宗栄などを加えて守らせた。しかし大島城は織田軍の攻撃の前に夜中に陥落した。大島城を手に入れた信忠はここにとどまり、城には河尻秀隆と毛利秀頼を入れ、先手を飯島(上伊那郡飯島町)に移らせた。そして森長可、団忠直、小笠原信嶺に先陣を命じた。こうして、当面武田氏の有する城で抵抗するのは、勝頼の弟の仁科盛信の守る高遠城だけになった。

二月二十九日、織田信忠が高遠の仁科盛信に降参を促したが応じなかった。三月一日に信忠は飯島から人数を出し、天竜川を渡って貝沼原(伊那市富原)へ進んだ。三月二日の払暁に織田軍は攻撃をしかけ、信忠が尾根続きを搦め手口、森長可・団忠直・毛利秀頼・河尻秀隆・小笠原信嶺が大手口をそれぞれ攻めた。城を守備する武田軍は死力を尽くして戦ったが、結局、城将仁科盛信ら四百人が壮絶な戦死を遂げ、城は陥落した。

二月二十八日、信濃で支え切れないと判断した武田勝頼父子と信豊は諏訪の上原を打ち払い、新府の館に兵を納めた。三月三日、織田信忠は上諏訪表に兵を出し、所々に放火した。

以上が武田氏に関する戦乱の時である。山城などが構築されるのは戦乱時なので、この後本能寺の変で織田信長が死に、その後天正十八年に徳川家康が関東に移封されるまでの時期に、山城などが構築されたが、永祿という伝承からして、またその後の政治の動きからしても堀の内の居館跡の場合、この時期は一応捨象して考えてよ

いだらう。

さて、この居館が伝承のように永禄年中（一五五八〜七〇）に使用されたすると、武田氏の上伊那を支配した三十年間のちょうど中間に当たり、武田氏の支配の安定していた時期といえる。このことを前提にして、その時期のほかの城や居館などとの関係で堀の内の居館をも考える必要がある。堀の内に近い場所から、辰野町全体へと目を広げて城の遺構を確認しよう。

大石城址（別名内城、大字樋口内城）―永仁元年（一二九三）に樋前城から樋口長門守光久がここに城を移す。天文十六年（一五四七）、樋口筑前守光信の時に武田の家臣秋山伯耆守、馬場民部等に破られ、天文十八年に城を破却した。<sup>(39)</sup> 縄張からして戦国時代に使われていたが、伝承の通りだとすると永禄年中にはこの城は使われていなかったであろう。

樋前城（大石城址の南に位置する）―樋口光久が永仁元年以前に住んでいたという。当然戦国時代には使われていなかった。

小式ヶ城址（大久保山）、狐ヶ城址（樋ノ沢山の峰、大字樋口山際大久保山）―ともに大石城主の物見の城。大石城との関係によって築かれたとすると、永禄年中には使われていなかったことになる。

古城（大字平出曲淵）―暦応年中（一三三八〜四二）、木曾家村が建武年中（一三三四〜三六）の武功によって足利尊氏から本領の木曾と共に伊那郡をあてがわれ、ここに家臣を置いた。その後大隅という者が住んだ。天正年中（一五七三〜九二）に武田氏の家臣、曲淵庄左衛門尉がしばらく住み、天正十年三月以来知行所に引き込んだ。<sup>(41)</sup> 伝承などからすると、この城は永禄年中も使われていた可能性がある。

曲淵の館跡（別名新城、曲淵）―曲淵庄左衛門の居館か。<sup>(42)</sup> 前の説

明からして武田氏滅亡後使用されたことになる。

荒神山（大字樋口荒神山）―武田氏が伊那に侵入した時、筑摩勢や伊那勢が籠り、後に武田氏の陣所となった。<sup>(43)</sup> 武田氏が伊那谷に侵入した時に取り合いがあったが、伊那谷を完全に制圧した段階では使われたかどうか不明である。しかし、場所の重要性からして、武田氏滅亡後の混乱の時期には改修の手が加えられたであろう。

小西城（別名古城、小野押野大洞口）―木曾氏の砦、草間肥前の砦、草間備前の砦。本郭（二メートル×一〇メートル）で、周囲に土塁の一部も残る。空堀を隔てて連郭をなす。城の残り方と伝承から、武田氏の侵入時に用いられ、その後も使われたようである。草野の古城（小野押野）―山頂に円形の平地とわずかな堀後、土塁が残る。草野氏の砦という。<sup>(45)</sup>

瀬戸城（木曾義仲の一夜城、横川国有林瀬戸沢の頂上）―諸説あるが、標高一七六〇メートルの高地に義仲が城を築き、しかも現在まで遺構が残っているとは考えられず、現地を見ても山城とは評価できない。少なくとも義仲の隠れ城説は根拠がない。

市川（別名市河・横川城、大字横河一ノ瀬）―単郭（五〇×二〇メートル）。郭からして、戦国時代にも使われた可能性がある。

大庭（別名横河城、大字上島町屋）―場所不明。実態は不明である。

竜ヶ崎城（大字伊那富宮所城山）―本郭の南に空堀を隔てて二つの郭がある。北に三つの堀がある。主郭は中央が低く、周囲に土塁が残る。武田氏が伊那に侵入した時に小笠原長時軍が守っている。<sup>(49)</sup> 麓の館は、天正年中（一五七三〜九二）に中西丹後が住んだともいう。<sup>(50)</sup> 戦国時代に使われたことは確実である。

天白の古城（大字伊那富宮木）―伝承や古文書によると、戦国時



代末（弘治年間・一五五五〜五八）に宮木の矢島勘六とその子勘兵衛が住んでいたが、天正年間に織田氏の侵略にあつて民間に下つた（32）という。戦国時代に用いられていたであろう。

古城（大字伊那富羽場）―城跡としての遺跡・遺物は不明。武田氏が伊那に侵入した時、小笠原氏の旗下の草間肥前がここで防ぎ戦つたという。後に柴氏が居住した。永禄年中にも利用されていたものであろう。

羽場城（大字伊那富羽場）―連郭・空堀・土塁が残り、戦国末に未完成のまままで終わつたと伝えられる。文禄年中に城を北の沢上よりここに移したという（34）。小笠原氏が住み、その小笠原氏は武田氏に臣従したともいう（35）。武田氏時代にはなかつたことになる。

陣場ヶ原（大字辰野唐木沢）―遺構は残っていない。義仲の家臣の砦跡とも、諏訪の金刺氏と木曾氏の間道の拠点とも伝えられる（36）。木曾義仲については確実ではない。戦国時代には使用されていなかったのではないだろうか。

大城山（大字辰野唐木沢）―主郭（五五×一三メートル）。空堀が残る（37）。空堀が残ることから戦国時代の用いられた可能性がある。

畑ヶ中の館跡（北小野）―今井氏の館跡（38）。

以上が辰野町に残る中世の居館跡と城の現況や伝承である。

このようにしてみると、この地域にとっては戦国時代の武田氏が侵入してくる時期は、山城や居館の歴史の中でも一つの画期であつたといえる。そして次の戦乱の波は武田氏滅亡とそれに続く混乱の時代である。ただし、武田氏統治の時代に積極的に山城が築城された形跡は薄く、むしろ領域支配のための平城が作られたので、地域支配のために人が配置され、道などが掌握された可能性が高い。その意味で、堀の内の居館は伝承のように永禄年中、すなわち武田氏の

支配が強化された時期に造られ、領域支配の意図を込めて武田氏が主体になって、この地に人が配された可能性が高い。

#### おわりに

すでに見てきたように、堀の内の館跡についての史料はまったく残つておらず、明治十年に現地に残つていた伝承と、周囲の地形、地字などからその持つ意味を読み取っていかなくてはならない。おそらく、発掘によって新たな研究材料が出てくるであろうが、地表面から読み取った本稿と、今後の発掘結果とがどのように切り結ぶか楽しみである。

いづれにしろ、これまでの結果からするとこの居館は、武田信玄の時代に諏訪と上伊那とを結ぶ有賀峠越えの裏道を押えるために、武田氏の意図によってこの場所に作られた可能性が高い。この背後には武田氏の安定的な上伊那支配が実現されたという歴史の動きがあつた。しかしながらその後、さらに武田氏の支配が安定すると、領国内において道の警備上の重要性が落ち、同時に平出から有賀峠を越えるルート的重要性が増す中で、関所のような役目を持つこの居館は、意味を持たなくなつたのではないだろうか。

仮にこのようなことが想定できるとすると、この居館に住んだ人物は自分の所領など地域支配のためにここに住んだのではなく、従つて山寺地域とは密接な関係を持たなかつたことになる。それ故に、地域の人達の記憶が弱く、本領が別にあつたため、居館の重要性がなくなると、本来の所領に戻つていったのだから。

この居館の位置は、戦国時代の村の中に権力側が容易に権力を浸透させることができず、多少の防御上の不利は承知していても、村の端に居館を構えなければならなかつたことを意味する。従来、戦



国大名の権力は強大なものと考えられ、村人に対しても思うが俣に権力を行使し得たと思われていたが、そういう戦国大名のイメージは近年変わりつつある<sup>(9)</sup>。この居館の位置もそうしたことを考えさせる材料になるであろう。

同時に、この居館が仮に武田氏の主導で築かれた場合、武田領国全体の中で交通政策がどのように変わったかをも検討しなくてはならない。武田氏が家臣をここに配置したとすると、どのようなクラスの間が、どのような形で配置されたかが問題になろう。また、永禄年中で館主がいなくなったとすると、それは武田氏の交通政策でどのような意味を持つのか、これも今後の課題として残る。

いづれにしる、発掘によってこの居館を考える新たな材料が出てくると考えられる。そしてこれによって新たな辰野町、ひいては長野県の歴史的事実、さらには戦国時代の実像が浮かび上がってくることを期待したい。近年長野県でも多くの中世城館跡の発掘がされ多くの成果を上げている<sup>(10)</sup>。そうした発掘成果の事例の増加は、確実に中世史を引き上げてくれると考える。

## 注

- 1 『長野県町村誌』《中・南信編》四五〇七頁（長野県町村誌刊行会・一九三六、郷土出版・一九八五復刻）
- 2 『長野県の中世城館跡―分布調査報告書―』（長野県教育委員会、一九八三）
- 3 篠田徳登『伊那の古城』（伊那毎日新聞社、一九七二）
- 4 『辰野町誌 歴史編』三八一頁（辰野町誌刊行委員会、一九九〇）
- 5 『明治初期長野県町村絵地図大鑑』一六四頁（郷土出版社、一九八五）
- 6 『長野県町村誌』《中・南信篇》三五〇一頁
- 7 『信濃国郷土史料 落原拾葉』下巻七六一頁（名著出版、一九七五）

- 8 『辰野町誌 歴史編』三七二頁（辰野町誌刊行委員会、一九九〇）
- 9 『伊藤富雄著作集』第二巻五二一頁（永井出版企画、一九七九）
- 10 『信濃史料』第九巻五一頁（信濃史料刊行会、一九五七）
- 11 『信濃史料』第一四巻二八六頁（信濃史料刊行会、一九五九）
- 12 『信濃史料』第一七巻四三三頁（信濃史料刊行会、一九六一）
- 13 『信濃史料』第一七巻一八五頁
- 14 『信濃史料』第一七巻四二六頁
- 15 『信濃国郷土史料 落原拾葉』中巻五二五頁（名著出版、一九七五）
- 16 『長野県史 近世史料編』第九巻七九頁（長野県史刊行会、一九八四）
- 17 『長野県町村誌』《中・南信篇》三五〇六頁
- 18 『信濃史料』第一巻一九〇頁（信濃史料刊行会、一九五八）
- 19 『辰野町誌 歴史編』三二九頁
- 20 一志茂樹「地名と国史」（『信濃』第四巻一号、一九五二）、一志茂樹「城館址の形態とその踏史的考察」（『信濃』第九巻一〇号、一九五七）、金井喜久一郎「城館跡における諸問題―主として中世の地方史研究の場合―」（『信濃』第二七巻三号、一九七五）、服部英雄「史跡の見方・調べ方―地名・城館・荘園」（『文化財保護の実務』上巻、柏書房、一九七九）、千田嘉博他『城館調査ハンドブック』九五頁以下（新人物往來社、一九九三）
- 21 『改訂総合日本民俗語彙』第四巻一四三八頁（平凡社、一九七〇）
- 22 『定本柳田国男集』第二〇巻一七五頁（筑摩書房、一九七六）
- 23 鏡味完二『日本の地名―日本地名小辞典―』一七頁（角川書店、一九六四）
- 24 『日本国語大辞典』第一八巻二五頁（小学館、一九七五）
- 25 戦国時代の建物などについては、小野正敏「戦国期の館・屋敷の空間構造とその意識」（『信濃』第四六巻三号、一九九四）、室伏徹「高梨氏館跡の発掘調査によせて―十五〜十六世紀の館跡・屋敷の郭内施設配置について―」（『信濃』第四三巻一一号、一九九一）がある。

- 26 一志茂樹「『かいと』考」(『信濃』第三卷一号、一九六〇)
- 27 『定本柳田国男集』第二〇卷一七〇頁(筑摩書房、一九七六)
- 28 『大百科事典』第二卷一三九四頁(平凡社、一九八四)
- 29 『新編伊那史料叢書』第二卷三九〇頁(歴史図書社、一九七〇)
- 30 『辰野町誌』近代編 九〇四頁(辰野町誌刊行委員会、一九八八)
- 31 同右九〇三頁
- 32 鏡味完二『日本の地名—日本地名小辞典—』四四頁
- 33 『明治初期長野県町村絵地図大鑑』一六四頁
- 34 拙稿「市・宿・町」(『岩波講座日本通史』第九卷、岩波書店、一九九四)、拙稿「甲斐吉田の町の中世から近世へ」(『信濃』第四六卷一—号、一九九四)、拙著『蛇拔・異人・木霊—歴史災害と伝承—』(岩田書院、一九九四)
- 35 拙稿「名字と地名」(『古代・中世の信濃社会』銀河書房、一九九二)
- 36 『辰野町誌』歴史編 四六六頁
- 37 『伊藤富雄著作集』第二卷四三五頁
- 38 以上については、拙著『戦国大名武田氏の信濃支配』(名著出版、一九九〇)を参照して頂きたい。
- 39 『長野県町村誌』中・南信篇』四五〇五頁、『日本城郭大系』8  
長野・山梨』二六七頁(新人物往来社、一九八〇)、篠田徳登『伊那の古城』一—二頁
- 40 『長野県町村誌』中・南信篇』四五〇五頁
- 41 『長野県町村誌』中・南信篇』四五〇五頁、篠田徳登『伊那の古城』一—五頁
- 42 篠田徳登『伊那の古城』一七頁
- 43 『辰野町誌』歴史編』三八一頁、篠田徳登『伊那の古城』七頁
- 44 同右三七七頁、篠田徳登『伊那の古城』四頁(伊那毎日新聞社、一九七一)
- 45 篠田徳登『伊那の古城』七頁
- 46 同右、三八四頁、島田安太郎・舟木慎吾『謎を秘めた大遺跡』木曾
- 義仲の隠れ城 朝日ヶ峯城址』(龍門堂、一九七三)、『長野県の地名』三七五頁(平凡社、一九七九)
- 47 『辰野町誌』歴史編』三七八頁
- 48 同右
- 49 『日本城郭大系』8 長野・山梨』二六八頁、篠田徳登『伊那の古城』二〇頁
- 50 『辰野町誌』歴史編』三七八頁、三八五頁
- 51 同右三七九頁
- 52 篠田徳登『伊那の古城』二二頁
- 53 『辰野町誌』歴史編』三七九頁
- 54 同右、三八七頁、『長野県の地名』三七九頁(平凡社、一九七九)
- 55 篠田徳登『伊那の古城』二三頁
- 56 『辰野町誌』歴史編』三八〇頁
- 57 同右
- 58 篠田徳登『伊那の古城』五頁
- 59 拙著『戦国大名武田氏の信濃支配』(名著出版、一九九〇)
- 60 私のそうした研究読み直しについては、拙著『戦国大名武田氏の研究』(思文閣出版、一九九三)を参照して頂きたい。
- 61 例えば、『発掘調査報告書第18集 青木城遺跡』(駒ヶ根市教育委員会、一九八五)、『金井城跡』(長野県佐久市教育委員会・佐久市埋蔵文化財調査センター、一九九一)、『長野県大町市埋蔵文化財報告書第17集 長畑・清水氏居館跡』(大町市教育委員会、一九九一)、『高梨氏館跡—発掘調査報告書—』(長野県中野市教育委員会、一九九三)などがある。

## 付記

本稿執筆にあたっては、三浦孝美・福島永のご教示を受けた。末筆ながら深謝する。